

けるくるーる

きょうはなにいろ?
こぎんとこぎんのある生活をたのしもう

第2号



発行:こぎん刺し 絵糸

2013/7/15

<http://kogin-eito.com/>



《新連載》

モドコ・アレコレ

こぎん刺しの柄は、伝統模様の幾何学的な組み合わせ。全体の柄のもととなる基本の柄が「モドコ」です。

〔ウロコ〕



三角形を並べたウロコのモドコは、日本の伝統の文様の一つです。古くは弥生時代の銅鏡や土器、また古墳の壁にも描かれていました。三角の連続柄は病除け、厄除けの意味で使われていたのです。それが蛇のウロコに似ていることからこの名前がつけました。もともとの厄除けの意味の他に

も、蛇は脱皮するので再生の象徴として、また、蛇は鱗のため前にしか進めないことから前進あれという意味を込められることがあります。

厄年の女性にうるこ文様を柄に使った着物を贈るといふ風習が残っているように、女性の厄除けの意味を表すことも多いようです。また、三つ鱗のように家紋として目にする事もあります。

伝統芸能の衣装でもおなじみで、能や歌舞伎では蛇などの化身の象徴として使われます。歌舞伎の有名な演目、娘道成寺の衣装に織り込まれたウロコ模様はとても豪華で、力強い美しさです。

一見単純に思える三角模様ですが、実はいろいろなところで使われてきたのですね。

モドコの名前や込められた意味を知ると、柄に物語が隠れているように思えてきませんか。多くや自然や生活の中でできたもどこ。



季節のぜいたく

②夏野菜

見慣れたモチーフがたくさんありますよ。

連日の暑さにおれた体も、季節の野菜を食へるとすこし元気が出てきます。

自宅のベランダで家庭菜園を始めた。青紫蘇と甘長とうがらしを一苗ずつ。なんとまあささやかな畑だろう。それでも、しその青い葉がフリルのように茂ってくると、収穫の時を今か今かとねらうのが楽しみでしかたなくなった。朝一番に窓から風に揺れる苗をのぞく。小さすぎず、育ちすぎず、ちょうどいい大きさに成長しているかい、と様子を見る。

数日後、ようやく頃合いとみて茎からぶちっと葉をつむと、あたりに爽やかな匂いが漂う。触った手を鼻先に近づけると、こちらもなかなかいい香り。しかし、収穫に夢中になりすぎてはいけない。

収穫のチャンス絶やさぬためには、摘みすぎはご法度なのだ。

収穫した葉は、すぐ台所へ。とれたての葉は、しわしわと特有のウェーブが美しい。店で買ったものより薄く儂い感じがする。そのくせ、香りはそれをしのぐほどに堂々としたものだ。この柔らかな葉を新鮮なうちに食べられる小さな贅沢。そそくさと調理に入る。

しそはそつと洗ってよく水分をとり、細切りにする。シーチキンに、薄くスライスして塩もみした玉ねぎを混ぜ、マヨネーズで和える。黒こしょうをこりこり挽く。少しだけレモン汁を。あとは、昨日見つけたパン屋で買った、まるいフランスパン。これを3センチほどの厚さに切り分け、シーチキンをこんもり盛って、先ほどのしその千切りをもっさり乗つける。

山盛りの具がこぼれないように少しフォークでおさえながら口に運ぶ喜びよ。あたりに初夏の香りがひろがる部屋で、しゃくしゃく

とほおばりつつ、次なる獲物を狙う目で甘長とうがらしの小さな花を見やるのである。

【青紫蘇】

古くから薬効があるとして重宝されてきた野菜。ビタミンA、ビタミンC、ミネラルが豊富で、殺菌



力と防腐効果も。食欲増進、貧血予防にもよしと、夏の食卓の心強い味方。

素材をつなぐ



世界中の女性たちが刺繍で衣服や生活の品を彩ってきた。だからこそ材料も多種多様にあるのです。

こぎん刺しの材料は、麻布と綿糸。かつては藍染めの手織り麻×生成りの綿糸という組み合わせでした。

今は様々な素材が使われるのですが、絵糸では、麻布と綿の糸という素材の伝統を軸に探して、生産地や風合いも様々なものを組み

合わせています。こぎんにぴったりの材料を探しあてる喜びも、つくる仕事の一つです。

ひとくちに麻布と言っても、織りの具合から縦糸横糸の太さ、また生産地でもしなやかさや顔つきが全然違います。顔つきの違う糸で刺せば、当然出来上がる柄もふっくら見えたり、さっぱりしたりと、風合いや手触りが異なるのです。

糸についても、こぎん糸として売られているだけで幾つも種類があります。

青森の手芸屋さんなどは店によって扱うメーカーも違い、燃りも太さも色合いにも、各店で繊細な個性があります。あるところは甘くよった温かな風合い。またあるところは現代的ですっきりとしたもの。渋い色の古典的な表情のもの。草木染めや手染めをほどこした糸は、色だけでなく染めの素材や技法のストーリーまでも魅力です。マットで素朴な中にも日本の仕事らしい懐かしさを感じて、そのこだわり惚れ惚れしてしまいます。

一方で、フランスの刺繍糸など

には日本にはないような驚くほど鮮やかで美しいブルーがあったりするのさすがというべきでしょうか。そうそう、ヨーロッパ生まれの麻がまどうシャレっ気も捨てがたい。

一束の糸、小さな麻布に潜む地域性や誇りには、見つめるうちに唸らされることもしばしばなのです。

7月の一句

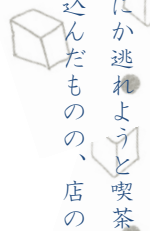


歳時記をめぐってみると、面白い季語がみつかることもあります。暑い夏こそ、クーラーの効いた部屋でのんびり探してみてもいい。

みつ豆三つ待つ時間の長いこと

(実)

街は熱い空気に包まれていく。どうにか逃れようと喫茶店に飛び込んだものの、店の



中は空調がきいていないではないか。

気を取り直して甘味を頼むが、その聞きこえるのは、厨房にいる女主人のあつい、ああ暑いという呟きのみ。

寒天の涼やかなのどごしにありつけるのは、一体いつになるやら。

ちよっと夕涼み



花火とバケツ・盆提灯・親族の宴・ほたる・羽化するセミ・近所のコンビニ・風呂上がりのビール・枝豆・犬の散歩・蝙蝠・虫さされ薬・蚊取り線香・夜風のドライブ・冷蔵庫の麦茶・野球中継・浴衣・ステテコ・うちわ・風鈴

おなじみの景色はありましたか？

《編集後記》

日本ってこんなに暑かったっけ…？「溶けそうになりながら」と初めて表現した人も、これほどの暑さなんて想像してなかっただろうなー、なんて思いつつ。皆様もお体ご自愛くださいませ。夏のイベント予定もまだありますので、旬のものを食べて頑張りませう。